

・「僕」この物語の主な語り手 小学校四年生。2004年5月生まれ。中学校に通う姉がいる。(姉は物語には登場しない。コロomboの奥さんのようなもの) サッカーが得意。食いしん坊を自認している。

自分の母親がアイヌであることは知っており、そのことに関する家族の話題なども今まで折に触れて見聞きしてきた。また最近では姉がアイヌ文化に関心を持っているのを横目で見ている。ただ、彼自身はこれまで、今まで特にアイヌ文化に興味があったわけではないし、少なくともそういうふうになるまで来た。

以前に学校で「自分の家族の歴史を調べてみよう」という宿題があった。このときは、彼なりにいろいろ迷って、親にもあまり相談せず、その宿題は少しアイマイに(主に父方を書いて)済ませてしまった。ただ、その後いろいろと気になって、今回、あらためて親に訊いてみた。

——ここから物語を始める。

	この世代が生きた時代背景＋伝えたいこと	キャラクター設定		時代の背景・くらし	トピック(グラフィック)と話題	備考
1	5世代前（1850年頃生まれ） ・幕末に生まれ、明治初期の、アイヌの社会が大きな影響を受けた時期に青年・壮年期。 ・伝統的な生活文化の中で育ち、それは当たり前前の素養として身につけつつ、新たな時代への対応を模索してきた世代。 ただただ伝統的な文化の中で生きていたわけではなく、新たに接した社会の文物に知的関心を持ち摂取してきたことも伝えられれば。	●(11) 高祖父の父(アイヌ) ・1847または48年生まれ。武四郎の記録にも名前が出る。 ・少年時代に漁場で労役。たいへん苦労した。同時に時代が変わりゆくあることを体感。読み書きなどにも関心を持った。1910年頃、息子のために村でいち早く板書きの家を建てた。 木彫りの名手として知られ、作品が博覧会に出たことも。	●(12) 高祖父の母(アイヌ) ・1850または51年生まれ。武四郎の記録にも名前が出る。 ・父母ともに漁場で働いていた。父はそこで自分稼ぎなども覚えたが、母は伝染病にかかってしまい、彼女が少女のころに亡くなった。 ・母は刺しゅうの上手な人で、その母への想いもあって、彼女も縫い物の技術に長け、近隣でも有名だった。 ・幼い頃から家族・きょうだいをささえてきたので、とりわけ勤勉な女性として知られる。	・ずいぶん前から、春から秋まで漁場で働くようになっていたが、このころになると、子どもとられるようになった(高祖父の父もつれていかれた)。 ・それでも、山あいの村には和人は滅多に来なかったので、山でけものとり、山菜をとり、川で魚をとり…という暮らしだった。 ・明治になって、和人の姿が増えた。 初めて移住民が入って家を建てたときには、珍しくて皆で見にいったものだ。冬への備えなど、とても見ていられなくて、いろいろと教えたこともある。 ・でもいろいろと規制も増えた。役人が来て姓を付けたのは二十歳ごろだったか。	・トッカラムらの家族写真(萱野茂二風谷アイヌ資料館)：場所請負制下での過酷な徴用を経験した世代であること を物語る資料として提示 ・木彫りの盆(捉捉)：曾祖父は、祖父(高祖父の父)が木彫りの名人だったと聞いて、昔の人の仕事を見ようと、東京に出たとき、わざわざ国立博物館まで見に行った。 ・針入れ(※アイヌ絵から変更)：高祖父の母が使っていた針入れは、その娘さん(＝高祖父の姉)に引き継がれ、曾祖父が郷土史編さんするときに、さらにその娘さん(＝曾祖父のいとこ)から見せてもらった。 【追伸】サケ漁規制の文書 【ケース】針入れ、小説『星座』	2-2-1(食べる)：生業の禁止に関する話題を入れる。
2	4世代前（1880年頃生まれ） ・明治中～後期の、北海道開拓が実際に道内各地に及び社会が大きく変わる中で少年・青年期を過ごし、大正～昭和前期に家族を支えた世代。(第3テーマの時代) ・伝統的な生活が色濃く残る中で、それらを知りつつ育つが、社会の変化に対応すべく、子ども(特に男子)には学校へ通わせることなどを強く求める。	●(9) 高祖父(和人の生まれ、アイヌとして育つ) ・1880年頃？生まれ。 移住民の子どもだったが、実親は養うことができず、一歳か二歳のころに、アイヌの家庭に引き取られて育つ。 ・親の方針で、十歳を過ぎてから設置された学校にも、幼い子らに混じって通った。ただ、家計を助けるため、小学校には三年ほど通っただけだった。もっと勉強したかったと思っている。 ・アイヌ文化もよく身につけた。若い頃はマタギ(狩猟)にも従事。のち畑、やがて水田にいそしむが、 給与地が劣悪でなかなかうまくいかない 。学校の保護者会の役員になったことも。 ・新聞をとりだしたのは彼が40才頃の1920年頃から。ちょうど普通選挙制度などが施行され、彼も政治・社会への関心をいっそう深めた時期。地域で初めて、ではなかったが、まだ新聞をとっているのは数件だった。	●(10) 高祖母(アイヌ) ・1882年生まれ。 ・父はマタギが得意で(その縁で夫となる男性と知りあいたった)、母は畑仕事をよくしていた。彼女も、この両親の薫陶を受けているところが、実は夫の両親が高く評価していたところ。 ・父がキリスト教の宣教師に傾倒、少女のころキリスト教の学校に通って洋裁を習う。アイヌ語の賛美歌も覚えていた。 ・母の実家のほうには馬の育成に関わる仕事に就いた人も多く、のちオリンピックも出たという著名な軍人に馬術を指南したという伝説の持ち主や、東京、関西で暮らす人も。 ・弟が日露戦争に出征。この地域のアイヌでは二人目か三人目の現役入隊だった。でも大きな怪我をして帰ってきたことが、たいへん辛い記憶になっている。	・幼い頃は、自分たちのまわりに和人は少なかったが、大人になった頃には和人が増え、村長、校長、巡査などの存在を意識するようになった。 ・子どものころ、悪戯して追いかけられたら便所に逃げ込んだものだ。 ・村で密漁でつかまる者が出て、時代が変わったことを実感。農具を手に入れてはたけをはじめた。 ・西洋人もやってきた。村の女性が作った縫い物や男がつくった木彫りが売れるようになった ・自分が結婚するころ、父親((11))が新しい家をたてた。村で4軒目の板葺きだった。(でも倉庫などは昔のまま) ・日露戦争があった。軍事講話もあった。幻灯会も見た。始めて汽車に乗った人の話など聴いた。(10)は少女のころ、「見どころあるから、イギリス行かないか?」とまで言われたものだ。	・小川佐助とテンポイント(写真)『『エカシとフチ』掲載)：馬の育成に関わる者があらわれたことについて、馬は前の世代では始めて目にしたものであることにも触れながら物語る資料として提示。 ・川村カネトの飯田線測量の光景(写真 川村カネトアイヌ記念館)：道内外の社会基盤の形成に積極的に取組貢献した人が多いことを物語る資料として提示。 ・函館・谷地頭アイヌ学校の知里ナミ(写真 函館市中央図書館) 【追伸】北海道旧土人保護法と浜益村給与地に関する誓願 【ケース】『ク スクップ オルシベ』	2-2-4(住まい)：(9)の子ども時代の家屋を例に、展示されている家屋がどの時期のものなのかを改めて示す。
3	3世代前（1910年頃生まれ） ・北海道の産業化が進行する中で生育した世代。都市近郊や道外への転住、様々な職業選択などが進む世代でもある。またアジア・太平洋戦争への出征や戦後の生活を担った世代でもある。(第3テーマ後半～第4テーマ前半の時代)	●(7) 曾祖父(アイヌ) ・1911年生まれ。父母(高祖母)が教育熱心で高等小学校まで進学。 ・親の農業を手伝いながら、青年団などの活動でも本をよく読んでいた。1930年頃になって、はじめてアイヌ神謡集を知り序文に感銘を受ける。1940年ごろから2年兵役をつとめる。 ・アイヌ語については、父母が敢えて教えようとはせず、また彼自身、若い頃にはアイヌ文化を学ぶことからは意識して距離を置いていた。ゆえに本人は、自分はアイヌ文化を知らない、と自認。しかし実は様々なところでアイヌの伝統的な道德観などを強く持っている。晩年になって、それは父母(9)(10)の無言の影響なんだと感じた ・高祖父(9)の影響もあって地域の歴史、アイヌの歴史に関心。郷土史編さんの委員をつとめたことがある。	●(8) 曾祖母(アイヌ) ・1910年生まれ。祖母(12の友人だった)の影響で縫い物に長けている。歌声もたいへん良い。ただ、長じてからは、アイヌ文化に否定的な風潮が地域の中にも入り込んでくる中で、人前であまり歌わないようになった。 ・晩年、地域でアイヌ文化の保存会ができ、その人たちからの再三の誘いで参加、1982～3年頃、アイヌの伝統音楽を文化財指定する調査に応じて、久しぶりに人前で歌い、研究者もその歌声といろんな知識に驚嘆。だが、人前では年長者をオリパクする姿勢をつらぬいた。 ・兄と弟がいる。兄は、戦後になって出稼ぎで関東地方へ、そこで自動車工場に就職してそのまま北関東に住む。弟は、学校のととき辛い目にあったこともあるらしい(親にも、きょうだいにも、詳しいことは余り話さない)が、高校在学中に親戚の木彫りが上手な人のところに弟子入りするようなかたちになって木彫りに熱中、本人もそれに打ち込んで明るくなったと語る。	・大人たちは、自分たちの世代に、あまりアイヌのことを教えてくれなくなった。儀式があっても、夜になると、明日は学校だから家に帰れ、となる。 ・研究者をはじめてやってきたのは青年時代。なんだか嫌な気持ちしがしたものだ。歌を歌うことにためらいを覚えたのはこのときかなあ。 ・でも、食べものは割と昔のものだったような気がする。魚も、けものも、自分たちでけっこうとったものだ。終戦のころの畑仕事は大変だった。 ・新聞のほか、雑誌など、青年団で一冊だけもっているのを読んだ ・仕事を求めたり、出世するだといったり、で札幌や室蘭、函館などに出て行く人があらわれてきた。戦後、1950年代くらいからの好景気のときに続々と出ていったかんじがする。村に電灯就いたのこのころか。	・平取町二風谷の水田風景(写真 沙流川歴史館)：水田耕作に取り組み、道内有数の米作農家になった人もいることを物語る資料として提示。 ・出征者を送る光景(写真 幕別町蝦夷文化考古館)：戦争に出征した男性たちのことを物語る資料として提示。このような写真が持つ意味についてのコメントも添える。 ・春採女子技芸学校(写真)(写真『ルロワー・グーランの見た北海道』) 【追伸】第2期国定教科書の挿絵 【ケース】アイヌ神謡集、絵はがき	(食べる)
4	2世代前（1940年頃生まれ） 戦時下・戦後社会で幼少期を経験、高度成長期に成年し就職した世代。日本社会全体の経済成長・社会変動を背景に、前の世代よりもいっそう生き方の多様化は進む。(第4テーマ後半の時代) ・また、厳然と続く社会的な不平等、生きにくさへの取り組みの中で、アイヌとしての活動がふたたび活発になりはじめる時代でもあり、それを肌身を感じる機会もある世代。	●(5) 祖父(和人) ・1939年宮城県仙台市生まれ。 ・北海道の伊達、白石に関心があったので、札幌の印刷会社に入職。 ・24～5歳のころ、営業先にいて何度か通ううちに見初めたのが妻((6))。 ・もともと、移住民の歴史などには少し知識も関心もあったが、妻と付き合う中で、自分の思い入れのあった移民の歴史と、アイヌの歴史との間の、厳しい関わりを改めて知る。妻の父母((7)(8))との対話の中で、さらにいろいろなことを学ぶ。 ・子どもたち((4))とそのきょうだいアイヌ文化への関わり方や、いわゆるアイデンティティの持ち方については、自分たち家族のなりたちや歴史を伝えた上で、選択は各自に任せている。	●(6) 祖母(アイヌ) ・1940年日高地方の生まれ。札幌で暮らす。 父((7))と母((8))の次女として生まれる。 ・アイヌ文化には内心で深い愛着を感じるいっぽう、地域の中ではやや著名な存在になっていた父に対する周囲の空気などには違和感が残り、地元の高等学校卒業後に札幌へ。短期大学で経理を学び札幌に就職。 ・夫と知り合い結婚し、そこでいろいろと夫に語り、また夫とともに日高の両親((7)(8))のもとを訪れることが、彼女自身も改めてアイヌ文化を学びなおす経験になった。幼い頃の暮らしの中にちばめられていた伝統文化のあれこれが実感とともによみがえる。中曽根発言などはその気持ちを大きくゆさぶった出来事の一つ。 ・札幌では、やはり今もアイヌ協会や保存会には関わっていない。同窓生や地元の知り合いにも、そうした活動に関わっている者もいれば、そうではない者もいる。	・若いころは、アイヌのことが新聞やテレビなどに出ると、なんだかよい気持ちしがしなかった。扱い方も嫌な感じものが多かったし。観光とか、あまり賛成していなかった。 ・大人になるころ、集団就職とか多かったので、自分も、と当たり前のように思っていた((6))。 ・アイヌのことは断片的には見聞していたが、最初は、なんだか観光地で踊っているようなイメージだった((5)) ・大人になって、結婚して、少し落ち着いてから、いろいろと見方も変わってきたかな。そんなときに、総理大臣の発言あったりして、発言そのものもびびくりしたけど、まわりの和の人たちの無反応ぶりもおっかなかった。 ・海外の先住民族が北海道に來たのを見たりして、ああ、こういう人たちもして、こんな歴史が、とも思った。	・1970年頃の十勝バス：多様な職業に就いた世代がいることを、バス運転手の例で紹介。 ・1980年代の平取のトマト畑：地域にとどまり農業などに取り組む人々について、前の世代と同じ平取町で、新たな作物であるトマト栽培の例を紹介。 ・宇梶静枝さんの新聞投稿(ウタリよ手をつなごう)：道外で暮らすアイヌが増えていることを背景に、首都圏でのアイヌとしての活動を目指した人々の動きを紹介。 【追伸】 【ケース】サルウングル物語	
5	1世代前（1970年頃生まれ） 現代社会の中で成人した世代(旧開拓記念館と同世代)。 ますます価値観や生き方が多様化、経済的な成長なども見込めない不安定な時代に成人を迎える。 伝統文化の復興・継承についての機運が高まり、ちょうど20歳代に萱野茂氏の国会議員当選などを見聞。他方、なお社会にはアイヌに対する様々な制約がまわりつくことを感じてもいる。	●(3) 父(和人) 1970年生まれ 福岡県に生まれ、北海道にあこがれて大学に進むときに札幌へ。就職も北海道の食品会社に。 1998年におかあさんと知り合い、約一年の交際をへて、1999年結婚。相手がアイヌであることについてのさまざまなことは、付き合っている間にいろいろと話を聞き、戸惑うことも多かったが、彼の相手への気持ちの強さが全てを後押しした。 ※語り手としてはあまり登場しない。	●(4) 母(アイヌ) 1970年生まれ 長女。 弟と妹がいる。札幌で(5)と(6)の間に生まれ、札幌の短期大学に進学、病院の栄養士に就職。 札幌では、ごく親しい知人以外には自分の出自を語ったことはなく、今も保存会やアイヌ協会には、関心を持ち理解はあるものの、自身は直接には関わっていない。 夫(「僕」の父)と札幌で知り合い、結婚した。 弟と妹がいる。弟は札幌近郊の自動車販売会社に勤務、妹は東京の出版社。弟はアイヌのことにはほとんど関わらない。嫌い、というわけではなく「だからどうした」的な立場。妹はむしろ、少し関心を持っていて、ときどき(6)に何か聞いてみたい。		・アイヌ協会の国連派遣：国際的な活動にも乗り出していることを紹介。((4)の同級生で英文学科に進学した女性が通訳を兼ねて同行したことがある) ・東京駅の通勤風景：多くの人々はこの展示を見ているほとんどの人々と同様に、この社会で生きていることを示唆する通勤風景などの写真を入れる。((4)の妹は、毎日ここを通勤している) 【追伸】萱野茂衆議院議員当選記事 【ケース】	
	((いま)を生きる子ども・青少年)	●(1) 僕	●(2) 姉			